

# 《楽曲解説》

解説＝松岡由起

7/12 第866回オーチャード定期演奏会

オーチャード  
7/12オペラシティ  
7/16サントリー  
7/17

モーツァルト(1756-1791)

## 歌劇『後宮からの逃走』序曲 K. 384 (316a)

『後宮からの逃走』は1782年、モーツァルトが26歳のときに作曲した3幕からなるドイツ語のオペラ(ジングシュピール)である。彼がこのオペラを書いたのは、肌が合わないザルツブルクを離れ、フリーの音楽家としてウィーンに定住したところである。当時ウィーンには2つの宮廷劇場が存在したが、そのうちのひとつブルク劇場はドイツ国民劇場として名づけられ、演目もドイツ語演劇のみに限られた。このオペラはそのブルク劇場で上演されるために作曲された。

モーツァルトはこのオペラの初演後コンスタンツェ・ヴェーバーと結婚する。ちなみに、このコンスタンツェは、ソプラノ歌手アロイジア・ヴェーバー(「2台のピアノのための協奏曲」解説で後述)の妹である。オペラの初演は好評、そしてコンスタンツェと結婚。このオペラが作曲された時期はモーツァルトにとって幸福に満ちていた時期といえよう。

さて、『後宮からの逃走』の舞台は18世紀のトルコ。主人公ベルモンテの恋人コンスタンツェ(偶然にもモーツァルトの結婚相手と同じ名前)は、彼女の女中とともに、海賊にさらわれてトルコに売ら

れ、太守セリムの後宮にいる。ベルモンテはコンスタンツェを救出するため、彼の召使いと協力し、2人は再会を果たすものの、逃走計画は太守の召使いにみづかり失敗に終わる。太守の召使いはすぐさま太守に報告。ベルモンテは太守に許しを請うが、話しているうちに実はベルモンテの父は太守の宿敵であることが発覚する。ベルモンテらは拷問を覚悟するが、最終的に太守が下した決断とは、「ベルモンテらに自由を与え、祖国へ戻す」という意外なものだった。太守は苦しみを与える不当な行為に慈しみで報いれば、悪で返すよりも意味がある、と考えたのである。最後は慈悲深い太守の徳を讃え、幕が閉じられる。

序曲は3つの部分(プレストーアンダンテプレスト)からなる。冒頭、ヴァイオリンによって軽快な主題が奏され、その後、トゥッティ(全体合奏)となるが、ここでは、ピッコロ、大太鼓、トライアングル、シンバルも含まれており、響きはトルコ風である。アンダンテでは第1幕第1場のベルモンテのアリア「ここできみに会えるはずだ」の冒頭と同じ旋律が使用されているが、アリアでは長調であるのに

対し、このアンダンテは短調である。アンダンテが終わると再び主題が現れ、最後は明るい響きで締めくられる。

[楽器編成] フルート1(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、トライアングル、シンバル、大太鼓、弦楽5部

## モーツァルト(1756-1791) 2台のピアノのための協奏曲 変ホ長調 K. 365 (316a)

モーツァルトは、複数台のピアノ協奏曲を含め、全部で23曲のピアノ協奏曲を残しているが、それらはザルツブルク時代(6曲)とウィーン時代(17曲)に作曲され、本作品はザルツブルク時代最後のピアノ協奏曲とされている。

本作品はマンハイム・パリ旅行後の1779年、モーツァルトが23歳のときに作曲されたと言われている(五線紙研究により、75~77年作曲の説もある)。マンハイム・パリ旅行はモーツァルトが大嫌いなザルツブルクから離れ、新天地での就職活動を目的とした旅行であったが、結局は上手くいかずに終わっている。しかし、この旅行では、例えばマンハイムにてクラリネットを伴った管楽器の効果について学んだり、ソプラノ歌手のアロイジア・ヴェーバーに恋心を抱いたり、そしてこの旅行に同行していた母を亡くしたりと、モーツァルトの成長を促すような様々な経験がなされたようである。

旅行からザルツブルクに帰郷後、モー

ツァルトは宮廷オルガン奏者となるが、やはりモーツァルトにとってザルツブルクは変わらず居心地の悪い場所であったという。

彼の複数台のピアノ協奏曲というと、他に「3台のピアノのための協奏曲(第7番)」が挙げられるが、その作品は各パートのピアノの難易度にばらつきがあるのに対し、本作品は姉ナンネルとともに演奏するために作曲されたと言われているためか、演奏技術において第1ピアノと第2ピアノは同程度の難易度である。

なお、本作品が作曲された前後には、「ピアノとヴァイオリンのための協奏曲」と「ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲」も成立しており、本作品を作曲した時期のモーツァルトは、パリで知った二重協奏曲の効果に関心を抱いていたと言われている。また本作品では、モーツァルトのピアノ協奏曲において、初めてファゴットが使用された。

**第1楽章** 変ホ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。冒頭は力強い第1主題で始ま

る。管弦楽が落ち着くと、2台のピアノが第1主題を変奏して登場。その後は第1ピアノと第2ピアノが交互に対等な関係で音楽を作り出していく。展開部では第1主題は登場せず、副主題が主体である。再現部では第1主題が回帰するも主題後半が短調になっており、冒頭と趣が異なる。

**第2楽章** 変ロ長調、4分の3拍子、3部形式。ヴァイオリンによるゆったりとした第1主題で始まり、その後その主題を第2ピアノが引き継ぐ。中間部で悲しげな調べが奏されたのち、第1主題が再現

される。

**第3楽章** 変ホ長調、4分の2拍子、ロンド形式。ヴァイオリンによる軽快なロンド主題から始まり、その後第1ピアノが副主題を奏で、つづく第2ピアノが1オクターヴ下で同じく副主題を繰り返す。中盤では短調へ転じ、2台のピアノに現れる三連音符の旋律と16分音符のトレモロが緊張感を高めていく。その後はロンド主題が回帰する。

[楽器編成] 独奏ピアノ(クラヴィーア)2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽4部

## チャイコフスキー(1840-1893) 交響曲第6番 口短調『悲愴』作品74

チャイコフスキーは19世紀ロシアの作曲家。法律の道に進み、法務省の役人になるが、22歳でペテルブルグ音楽院に入学し、役所勤めと音楽院を掛け持ちする。翌年、法務省を退職し、音楽の道に専念。卒業後は、モスクワ音楽院で教鞭をとりながら、作曲家としての人生を歩み始める。

チャイコフスキーは、同時代のロシアの作曲家、例えば『展覧会の絵』を作曲したムソルグスキーや『シェエラザード』を作曲したリムスキー=コルサコフらロシア五人組を民族派と称するのに対し、

その洗練された作風から西欧派と位置付けられることが多い。

チャイコフスキーの交響曲は、『マンフレッド交響曲』を除くと、6つ存在する。

交響曲第6番『悲愴』は1893年2月に着手され、同年8月に完成されたチャイコフスキー最後の交響曲である。作曲者自身の指揮によって同年10月に初演されるが、その9日後、チャイコフスキーは53歳で急逝してしまう。その死因は今まで様々な議論がなされてきたが、今日ではコレラによるとする説が有力である。

タイトルの『悲愴』は、従来、第モデス

譜例1 第4楽章 冒頭

譜例2 第4楽章 再現部

トによるものと言われてきた。チャイコフスキーは初演後モデストにこの交響曲にふさわしい標題について相談しており、モデストは最初『悲劇的』を提案したがチャイコフスキーが納得せず、その次に提案した『悲愴』が採用されたという。しかし、よく知られているこのエピソードは、今日ではモデストによる創作という説が濃厚である。最近公表されたユルゲンゾーンからの9月の手紙に“悲愴”の言葉があり、作曲者自身がタイトルを付けた可能性が高い。

ちなみに、この『悲愴』の原題は“パティエーチェスカヤ”(ロシア語)であり、その意味は悲愴というよりは“情熱的”“感動的”である。つまり、『悲愴』という日本語訳にみられる“悲しい”といったニュアンスは原語にはない。ただ、『悲愴』というタイトルはこの作品の特徴を端的に表しているといえよう。

**第1楽章** 口短調、4分の4拍子、序奏付きソナタ形式。コントラバスの半音階下行の上で、ファゴットが陰鬱な旋律を奏でる。この旋律に示されるように、序奏は重々しい雰囲気支配されている。提示部に入ると、序奏の旋律に基づいた第1主題がヴィオラにより登場するが、序奏よりも幾分リズムカルである。だんだんと緊張感を帯び劇的な方向に進んだかと思うと、今度は解放感にあふれた穏やかな第2主題がヴァイオリンとチェロに現れる。この第2主題は最終的に木管楽器が受け継ぐが、「pppppp」という指示があるように静かにおさまる。そうかと思うと突如大音量で全楽器が鳴り響き、速度を上げ、展開部に入る。展開部では主に第1主題が展開される。劇的なクライマックスを迎えたあとは再現部にて第2主題がたっぷり情感込めて歌われ、そのまま穏やかに締めくくられる。

**第2楽章** 二長調、4分の5拍子、ワルツを感じさせる楽章。4分の5拍子はあまり馴染みのない拍子設定のように思われるが、ロシアの民謡にしばしば出てくる拍子であるという。冒頭、軽やかにチェロが旋律を奏で、その後は様々な楽器がそれを引き継ぐ。中間部は口短調へと変化。ティンパニが規則正しく拍を刻む上で、フルートとヴァイオリンとチェロが不安気で寂しげな下行の旋律を奏でる。再現部では冒頭の旋律が回帰し、静かに終わる。

**第3楽章** ト長調、4分の4拍子(8分の12拍子)。ヴァイオリンによる細かなスタッカート音型で始まり、途中からは行進曲風の旋律があらわれる。これら性格の異なる音楽が交互に登場することでこの楽章は構成されている。最後は力強く閉じられる。

**第4楽章** 口短調、4分の3拍子。この楽章に至っては、まず冒頭のオーケストレーションの巧みさに注目されたい。本楽章は、「ファー・ミ・レ・ドー・シ・ドー」という極めて哀切な響きを持つ下行の第1主題から始まるが、これにはある仕掛けが隠されている **譜例1**。ここでは、ヴァイオリンIとヴァイオリンIIが第1主題

を分け合うことで構成されているのである。中間部では第1主題と共通して下行音型からなる第2主題が弦楽器に登場するが、二長調であるゆえ、悲しげではありながらも温かさを併せ持った響きである。やがて金管楽器が加わり小さなクライマックスを迎えると、第1主題が繰り返されるが、ここではヴァイオリンIのみによって楽章冒頭よりもはっきりと奏される **譜例2**。ホルンのゲシュトツトのつぶれたような響きが聴こえてくると本楽章最大のクライマックスを迎える。終盤に向かうにつれ曲はだんだんと絶望へと向かっていき、最後は弦楽器が低音を響かせながら、「pppp」で消え入るようにして終わりを告げる。

**[楽器編成]** フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、弦楽5部

まつおか・ゆき(音楽学) / 桐朋学園大学、慶應義塾大学大学院修士課程(美学美術史学専攻、音楽学)を経て、現在同大学大学院博士課程在籍および国立音楽大学音楽研究所研究員。専門はバーンスタインをはじめとする20世紀アメリカ音楽。